声だけを聴いて

ひずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
声だけを聴いて

【Ｎコード】
Ｎ８９０６Ｘ

【作者名】
ひずる

【あらすじ】
桐野夏花は修学旅行で『女子から』１０人以上告白されるイケメン女子。本人はうんざりしているのに、人気は上がるばかり。あまりのアプローチの多さに、ある日夏花は彼氏を作ることを決意する！

第1話（前書き）

覗いていただいてありがとうございます！
更新は遅いですが、楽しんで書いていきたいです♪

第1話

「す、好きです」

出た、修学旅行お決まりのコレ。
みんなと一緒に6泊7日、毎日楽しいイベントに溢れる関西への旅行。
浮かれ気分になるのも当然なんだけど、旅行が始まって3日、さすがに8回目の告白ともなると気が滅入ってくる。

「ずっと桐野さんのこと好きだったの」

そのセリフ、昨日も聞いたとも言えずに曖昧にうん、と頷いた。
毎日毎日なぜ…。
正直もう勘弁ほしい。
お気持ちは嬉しいのですが、よく考えて！

私は女なの！
なんで修学旅行で女子にばっかり8人も告白されなきゃいけないの？

1回目。
「桐野さんって、ほんとに彼氏にしたい」
なれませんて。

2回目。
「私でよければ、付き合ってください！」
いやいやいや、あなたがどうのこうのの問題じゃなくて！

３回目。
「女だっていいの！」
私はよくないっ！

４回目。
「私だけを見ててほしいの」
見れませんから。

５回目。
「…す…す…す…すき…すき…なんです」
何回『す』って言うか数えちゃったよ！

６回目。
「お試しでもいいから！せめて、修学旅行の間だけは私の彼氏になって？」
試せるか！だから彼氏になれないって！女！

７回目。
「あたし、勇気を出して告白したの…」
あ、ありがとう…まぁ、７人目なんだけどね。

そして８回目。
私が「ごめんなさい」と謝ると、彼女は手のひらで顔を覆って泣き出してしまった。
あぁ、こうなると慰めなきゃならない。
もう夜の１１時半。
１日大阪を回った私たち５班はくたくたで、呼び出しを食らった私以外の班員はさっさと寝てしまった。
私だって早く寝たいのに。

もう、どうすればいい？
誰でもいいから助けて！！

心の叫びは届かず、結局彼女を慰めてから2時に布団に潜り込むことになった。

あぁ、ついてない…。

第1話（後書き）

どんな子なんだ桐野！？
詳しくは第2話で♪

第2話

修学旅行の壮絶な日々を思い出しながら、私は放課後に校舎の屋上で紙パックのジュースをちびちび飲んでいた。
１０月も半ばを過ぎ、さすがにブラウスにスカートだけじゃ肌寒く感じて軽く手を擦りあわせる。
私の名前は桐野夏花。９月に誕生日を向かえたばかり、１７歳になりたての高校２年生！
得意科目は英語と体育、苦手科目は社会。
部活は帰宅部で…自称エースです。
そんなごくごく一般的な私の悩み、それは『女子に恐ろしくモテること』。
男子じゃなくて、女子。

…なんで？
人によく聞かれるけど、私が教えてほしいくらいだから！
好かれるのは嬉しいけど、本気は困る。

「ナツがかっこいいからよ」
いつものように頭を抱えて悩んでいたらしく、状況を察した友人が言った。

「モテる理由、簡単でしょ？身長は１７５オーバー、スポーツはなんでもこいだし、細身でスタイリッシュ。ちょっと切れ長の目にスッとした鼻筋！髪の毛はうらやましいくらいサラッサラだし、なにもしてないくせにちょっと茶髪っぽくってかっこいいからよ」

それに、と友人は続けた。
「女の子には基本的に優しくて、いわゆる乙女心もわかってくれて。

そこら辺の男子よりいいに決まってる」
「あ、ありがとう…」
「ほめてないわよ」
「うっ…」

今川春花はぷいと横を向いて、紙パックのジュースを一気飲みする。
春花とは中学校からずっと一緒の親友。
中３のときは『春花・夏花コンビ』と呼ばれていた。
女子にばかりモテる私と違って、春花は男子によくモテる。
色白の肌にぱっちりした目とか、ゆるくパーマのかかった髪とか、
とにかく至るところが女子感であふれていて、女の私でも惚れそう
なくらい可愛い！
なのに、春花は恐ろしいくらい毒舌。
さらっとひどいことを言うし、特に私の髪の色がうらやましいらしく、絶対に一言二言皮肉を混ぜてくる。
でも、それも可愛いから許してしまう。
これがギャップ萌えっていうのかなぁ。

「またバカなこと考えてない？」
「な、ないない！」

ならいいけど、と言って春花は顔を上げ、空を仰いだ。
こんな何気ない仕草も様になる。

「ところで、結局何人からコクられたの？」
「え？」
「修学旅行よ、この前の」

空を仰いだまま訊かれた春花の質問に少しだけたじろいだ。
そういえば結局何人だっけ。

忘れた訳じゃないけど、怖くて数えてなかった。

「8？いやウソウソ！えーと、10かな？」
「はぁ、あいかわらずモテるのね、女子に」
「じょ、女子にって言うなー！」
「違うの？」
「いや…まぁほんとですが…」

いいわね、と呟いて春花はくるりと体を回転させた。
右手には空の紙パック。
もう話すことはないとばかりに、すたすたと校舎の入り口まで歩いて行った。

「ま、待って！」

私もあわてて残りのジュースを飲み干し、後を追った。
152cmと小柄な春花は1歩も小さい。
すぐに追いつくと、入り口のドアを開けてあげる。

「それよ、それ。そういう紳士的なことをするのがモテる原因なの」
そう言いながらも、春花は当たり前のように開けられたドアから中に入り、先に階段を降りていく。

「別に女子にだからやってるわけじゃないよ？昔からよくやってたし」
「それがおかしいの。今だから言うけどね、おばさん、ナツの教育間違えたと思う」
「えぇー？」

きっと冬くんの影響もあると思うけど、と言って春花は最後の1段をとばすと、先に3階に降り立った。

「じゃ、私図書館で勉強していくから」
「あ、うん。がんばって」

少し遅れて3階にたどり着いた私は、可愛らしく手を振る春花に向かって頷く。
お昼の時間は、放課後に屋上行きたい！行きたい！と言ってたくせに、自分が満足すればすぐに去っていく。
まるで黒猫みたいと思いながら、春花の背中を見送った。

第2話（後書き）

冬くんってダレ？
次書きますっ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8906x/

声だけを聴いて

2011年10月26日01時00分発行